

せ た か む い

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第八十号（毎月一日発行）
平成八年五月一日

北海の古平風土物語

四七

子供たちの四季の遊びと仕事の手伝い (2)

高橋源 五口

――夏――

鯨漁期が終わる頃になって雪が解け、ようやく道路も乾いてくる。登校や下校の道々、叩き木こま打ちや、地雷玉打ち、それに家の壁板にぶっつけて飛んだ距離を競う、豆飛行機飛ばし、（一銭に八枚くらい）が始まる。

そのほか縄跳び競走、石蹴り競走、国とり遊び、ガッキ（ガツケ）、竹とんぼ飛ばしなどをする。

学校の戸外運動場や鯨の干場あと、空き地に集まっては、わら縄を丸めて作ったボール、手かえし（厚手の布で作った手製の手袋）や手掛け（糸で刺した手袋）のグローブ、落葉松のさきりで作ったバットで野球をして遊ぶ。これが晩秋の頃まで続くのである。

当時は本草製のグローブやミットなどは、大人用のものが学校の備品として数個あるくらいで、高価なのでなかなか買えなかったのである。野球ボール一個十銭、柔らかいゴムまりが一個五銭であった。

女の子たちは子守りをしながら、まりつきやあやとり、カド石打ち、縄飛びなどをして遊んでいた。きれいな模様のついたゴムまりは一個、大が二十五銭から三十五銭、中が十五銭から二十銭、小が十銭から十五銭であった。

楽しみなものにカニ捕りがあった。古平橋の下は川尻や、近くにあった土場では流木を止めるのに丸太で柵を作っていたので、暗い夜を見計らい、そこに手製の力二簗を仕掛けておくとカワガニが入っていた。次兄の

（小野寺源次郎）はこのカニ捕りが好きで、餌にする糠漬けにした鯨を持って、毎晩のように川尻の辺りに通った。このカワガニは甲羅が黒く、親爪に毛が生えていて、手ごろの大きさで大変うまいものであった。月夜の力二は身がうすいといわれ、暗い夜によく捕りに行った。

夏になると沖村（沖町）、歌棄山中（歌棄から沖町までの海岸）、本陣、弁天岬（丸山岬）、群来村（群来町）方面の磯でアワビ・ヒヨリ貝・ナマコ、ガンゼ・ノナなどを潜ってとり、それを海水でさっと洗って食べたがなかなかうまいもののひとつであった。

ところがある日のこと。運悪く水産組合の見回りの人に見つかり「禁漁のものをとる者は海賊だ」とどやされ、さんさん叱り飛ばされ大目玉をくらった末に、とったものはみんな海に放棄せられて逃げ帰ったこともあった。

当時、岩礁の多い浜にはノリ・ワカメ・厚くて長いコンブ（銘柄は積丹昆布）・テングサ・ギンナン草・モゾク（モズク）などがたくさん生えていた。漁家の人たちは、毎年時期になるとこれを取り製品にして売っていたので、家族の人たちにとってはなかなか多忙であった。

■蝦夷地の鹿のこと

イシカリ川の南に住む鹿は、秋になれば川を渡って東蝦夷地のシコツという所の山へ行く。これは西の地は雪が深くて食物が無いからである。その時アイヌの人たちは舟に乗り、川岸の草などの生い茂った下へ舟をつけ、その上に丸太を三本ほど差しかけその下へ舟を入れ中に隠れる。やがて鹿が川へ飛び込んで来て向

アイヌの「ことわざ世間ばなし集」から

こう岸へ渡るところを、舟を乗り出して川の中で打ち殺す。熊が渡る時にもしかまったりすると、たちまち舟を覆されてしまう。

シコツへ渡った鹿は、春になればまた川を渡って元の場所へ帰る。しかし近年は鹿を獲り過ぎたため、残った鹿は東蝦夷地から海を越えて南へ逃げ去り、今は蝦夷地も鹿が甚だ少なくなった。

▼はじめに

この頃「稲倉石鉱山」のことを聞きたい、という問い合わせがあり、昨年の暮れからもう四件にもなる。

以前、稲倉石鉱山で働いていたことのある人、レポートを書く資料がほしいという学生、廃山になった鉱山について調べているという人などなど——である。

平成三年、古平町史の原稿から「稲倉石鉱山」の部分だけを印刷して配布したことがある。かつて稲倉石鉱山で働いていたという方からは、いろいろとお話を聞くことができ、中学生からは「少し難しい」ということであった。

▼草に埋もれた鉱山跡

稲倉石鉱山は、マンガン鉱の生産で太平洋戦争中に急激な発展をとげ、その後一時不振であったが、昭和二十年代の後半から三十年代に最も繁栄し、かつては古平町の年間生産額の四十一%余りを占める程であった。しかしその後、国内での需要

—百年の歴史を閉じる—

稲倉石鉱山 ①

が減ってきたこと、海外から安いマンガンが入って来たこと、それと、マンガン鉱の埋蔵量から今後の経営の難しいことが予想されることなどから、昭和四十五年三月、北進鉱業㈱に鉱山を売り大江鉱山と合併した。合併後も経営の不振から、昭和五十九年五月、ついに廃山となった。

また、以前に経営していた鉄興社も、経営不振から東洋曹達㈱に吸収されてしまい、一世紀余りにわたった稲倉石鉱山の歴史もここに幕を閉じたのである。

▼顔を出していた金鉱

それは明治十八年七月のことであった。鉢場で使う薪の切り出しをしていた大井嘉蔵・猪股五平・和田清作の三人が川に木を流していた時、思いがけないことに川岸で金の鉱石が現れているのを発見した。

その後の事情はよく分かっていないが、発見者の名前から一字ずつとって『大股鉱山』と名づけ、はじめは三人が合同で手掘り程度で試掘をしていたが、間もなく資金難から中止した。これが後の稲倉石鉱山の始まりで、最初は金の鉱山として開発されたのである。

▼本格的な開発に着手

明治二十二年五月頃、北海道鉱山株式会社これが買取し試験掘したところ、金鉱の鉱脈である金鱧坑・秀吉坑から、金鉱にまじって銀の含有量の多い銀鉱が出たことから、金・銀・銅の鉱山として本格的に開発を始めた。鉱石は木炭を使って自分の所で精錬したが、当時の精錬法は幼稚なものだったと伝えられている。

しかし一時期には、従業員が

~~~~~

## 青峰観音さまのお祭り

竹内こと

私たちの小さい頃は、兄や友達といっしょに丸山の観音さまのお祭りによく出かけたものです。

社の境内といっても狭いところでしたが、道路にまであちこちと出店がありました。また余興としての、子供から大人までの相撲大会や兵隊さんの銃剣術の試合、見せ物の道化師、それに舞台まで作って、地元のご婦人方による唄や舞踊などもあった、それはそれは大変賑やかなものでした。

兄は相撲に出ては、よく賞品

三百人を数える程の盛況だったが、明治二十八年日清戦争後の不況から次第に経営が悪化し、明治三十三年、ついに鉱山を放棄し廃坑となった。

× × ×

（大井嘉蔵は金鉱であることがどうして分かったのか？ 一説には、彼は山を越えた泊炭坑で臨時に働いていたことがあるので、その時に、鉱石のことについて何らかの知識を得たのではないか、といわれている）

を貰ってきていました。私はいくらかの小遣いの中から「チリカンカン」という飴を買って食べた覚えがあります。その飴というのは割りばしにくるくると巻つけた水飴で、恥ずかしさも何もなく、舌でペロペロとなめていたものです。リヤカーに大きな箱をつけ、旗を立てたアイスクリーム屋さんのところでは、氷の中にいれた円筒形のものぐるぐる回すとアイスクリームができるので、それが珍しくて黙って見ていました。

←（次ページ三段目へ続く）



# 吉平ホトトギス会

バス降りて呼び掛けらるゝ赤い羽根 大島 喜恵

終湯にひたり吹雪を聞く夜かな

久しぶりストーブ焚いてピアノ弾く 山口 浪

老ホーム深夜見廻りの吹雪かな

譲らるゝ席は窓側大西日 斉藤 波留

馬の背に鴉遊べり牧うらゝ

新緑の透き間くゝの駅舎かな 越野 清治

山頂のホテル包める花曇

春雷の一と鳴にして不吉めく 大和田 伊絵

きらめきて夕焼雲に海猫乱舞

釣りをして暫し見送る春の雁 木村 芳園

花林檎お岩木山の麓村

流水に乗りアザラシの親仔かな 水見 句丈

オホーツクの流水に憑き尾白鷺

鈴蘭の丘が変りてゴルフ場 仲谷 美砂

鈴蘭を摘みし面影みな若く

看る妻の寝顔見るたび謝す今年 岩瀬 みのる

風強き積丹岬山桜

退院の夫に忘れじ寒卵 越野 スミ子

神域の森の一步に囀れる

転勤の僻地の馬鈴薯が届きけり 越野 敏雄

初孫に真鯉緋鯉の織かな

雪下ろしまだ頼らるゝ齡かな 福井 幸平

新雪に吾が足跡の五キロ走

雪解川一直線に突堤へ 仲谷 比呂子

子供等の合宿二日夜は花火

知らぬ間に梅酒のコルク飛んでをり 福井 久美子

盆の僧御茶も召されじ帰りけり

おまつりのししにあたまを食べられた 仲谷 安代

(小学校一年当時の作)

## 春の陽気にさそわれて

ひとりごと

福井 幸平

今月はどうしたものか、これというテーマなき老人の『ひとりごと』否、つぶやきかも知れない？ が、ついに筆を走らすことになった。

毎月、気に向くまま六キロを走ったり歩いたり、そして今朝は、泥の木橋まで片道四キロをブラ／＼歩いて来た。トリム会長の若山伸夫さんとごいっしょだったせい、大変楽しかった。途中、村上隆治さんとこの山菜ならぬニラを沢山頂いて恐縮した。

出掛けにまず一句が生まれた。

「町を出てすぐゴルフ場芝青む」

これをゴチャ／＼推敲することもないので、こんな出会いの句が上手下手は別にして好きな私です。さらに泥の木橋をのぞいて、

「水増えて濡れしまゝのふきのとう」

まあ、今日はこの二句で満足かな？ さて初老？ のせいか



クラス会あの顔この顔皺の顔 石井 愛子

良妻も賢母も捨ててババの顔

意に沿わぬ事は聞こえぬ振りをして

鯉場のちぢの話はばばが聞く 渡辺 ハツエ

群離れ鴉が餌をひとりじめ

「トロフィー」貰う術なき老の果て

(なぜ俺が初老なのか、実は家内の母が九十七歳で、同居して八年ぐらいになるが、私は自分を老人だと思ふ自覚が少ないから、あえて、くやしいがせめて初老と書く) 年々人が恋しいので、誰彼となくごあいさつをするよう心掛けている。若いときは子供と接する機会が多かった。やれスキーだ、水泳だ、野球だ、ソフトボールだと、柔道は無理偏にげんこつで随分とムチャクチャ頑張った時代が長かったようで、淋しいとか、人が恋しいとか思ったことは無かったのだが、人間誰しも淋しがりやなのか、わずらわしい人間つきあいが面倒だという人でも、小鳥を愛して山野に出かける人、諸々の方の言葉を愛する故に

本を読む。人間なにかと向き合つて対話しながら生きている気がする。せめて生きている今を楽しくすごしたいものとおもう。力の弱い者同志お互い助け合つて、精いっぱい生きましようや。人は老いるもの、いつか終わりがあつるもの。

歩きながら、毎日の自然の四季の移り変わりを肌を感じつつ、「オウム教」のことを考えたり「エイズ薬害」「住専問題」等々。世の中の大きな「うねり」をいま／＼しく思つたり、高学歴の医者だの、弁護士だの、大学の先生だのと、さらに大蔵・厚生・何々銀行のおいら方に対して、迷信めいて尊敬等いつべんにふつとんでしまったことは、私だけでなく皆さんも同じだと思ひます。人間、レッテルで見分けしない方がよろしいようでハイ。

そう思つても、人間の中身を見るレントゲンが開発されてないからむずかしいと思うけど、吾々長いこと生きてきたわ

ずかな知識とか、経験とか、動物的直感に頼る外無いのかも知れない。

それにしても私如き晩学の者には、辞典というもののありがたさを感じみじみ感ずるこのごろです。ここでそろそろお茶でものみましようか。そろそろお断りしたようにテーマなき老人の『ひとりごと』も終わりに近づきました。もうひと言、私の小さな発見として、人との出会いを大切に思つてきましたが、それ以外に自分自身の知られざる再発見もあることを知りました。

簡単に言つと、喰わず嫌いという発見もあろうし、無知の故の無関心、誤解もあろうし、己れ自身の修行修養によつてどん／＼変わつてゆくものだし、変えられるものだと気づいてきました。多くものを知り、多くの楽しみを体得し、人様にも沢山のよろこびを差し上げたいものと思ひます。

またお目にかかりましょう。お元気でさようなら。



♣ (次ページ下段より続く)

したがって羅漢さんは大正の末から現在まで、その間、線香やたばこの煙に悩まされながらジツト世の中を見てきたわけである。ざつと七十余年の歴史を——、できることなら、羅漢さんにその歴史を語ってもらいたいと思つている。

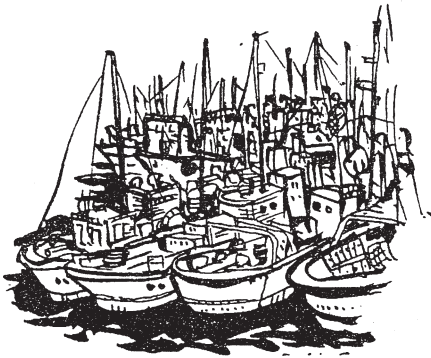
※『五百羅漢』も全国に何か所かあるようで、大分県耶馬溪町羅漢寺・大分県宇佐市東光寺・埼玉県川越市喜多院・東京都目黒の羅漢寺・鎌倉の建長寺・福井

県の永平寺には彫像、

京都の東福寺・大徳寺・東京の増上寺・宇治の万福寺の絵画などはよく知られている。

× ×

喜多院(川越大師で有名)の五百羅漢にあやかり売られている『らん餅』のパッケージ



長寿らん餅  
四越大師



## 五百羅漢

あれこれ

近ごろ、禅源寺の『五百羅漢』に人気があつて、遠くからでも団体で見学に訪れる人が多くなつた。

子供のころ、お寺参りについて行くと「五百羅漢の絵の中には、知っている人によく似た人が三人いるんだって——」と、よく母から聞かされたが、ガランとした薄暗い本堂に掲げてある五百羅漢図は何か異様で、時にはオッカナ半分で見つていた記憶がある。

五百羅漢の一人ひとりと逢っているという川柳があるが、

額の中の一人一人の顔を見ていると、その中には自分にとって懐かしい人、忘れられない顔がある。そんな思い出にかつていると時間なんかはすぐに経ってしまう。

五百羅漢を見学に来られた方の案内をすることがあるが、しばらく立ち止まって感慨深げに見つめている人などは、きっとこの川柳と同じ気持ちにひたっているのかも知れない。

ある時、農協の団体で来られた中に、正座して正面のご本尊・釈尊、道元禅師・螢山禅師を礼拝してから、五百羅漢図の前で合掌している方がいた。あまりの信心深いのと、その熱心さに驚いて聞いてみたところ、「私の生まれた明治四十二年この寺が建つたと聞いたし、この絵も、亡くなった父の写真とよく似ています。」ということだった。

五百羅漢を通りぬけては疲れきる

似た顔があつたものの、中にはそれがあまりいい思い出でない顔もある。意地悪だった人、威張つてばかりいた人、ずるかった人などなど。そんないやな顔を思い出しながら見ているとホンとに疲れのるだろうナ。こんな思ひの川柳である。

五百羅漢を案内していて、たいして興味や関心もなく、手持ちぶさたにただ本



楽



激

堂をぶらぶらしている人もたまにはいるが、この川柳のように「疲れた？」人なのだろうか。

三、四年前、木版画集『羅漢さん』というおもしろい本が出た。まえがきに、「……羅漢さんと言えば、喜怒哀楽のことばがかえってきますが、人々の喜びや哀しみ、怒りの姿を見るのには、酒の場面を欠かすことができません。……」これも羅漢さん？——とにかく見ていて楽しくなる羅漢さんがいっぱい載っている。

小樽市の宗円寺の五百羅漢は、五十センチ程の木像で五百十一体あるという。昭和四十一年に市の有形文化財に、平成六年一月二十七日には道の有形文化財に指定されている。

禅源寺の五百羅漢図も新聞やテレビで紹介され、すっかり有名になったのだから、この際、町の文化財として保存方法や観覧等について具体的に考えてみたらどうでしょう。

林竹治郎先生が大正八年に描き始めてから間もなく、五百羅漢図は出来上がったものから順に本堂に掲げられ、二十年後の昭和十四年までの二十年間をかけて完成した。



# いまは亡き友をおもう

本 間 銀 朔

大正十二年（一九二三）に新地分教場が丸山の麓に新築されて（元の古平高校はその跡地に建設）、一年生から四年生までが通学し、港町の旧郵便局（幾井さんより少し新地よりの所にあった）を境にして、入船町・丸山町・新地町が通学区域となりました。

分教場は四学級、四年生は最上級生でこの組には特別に元気のよいのがおりました。後藤敏一、髭金松、田中佐一郎君らは喧嘩は早い、随分と友達もいました。今の学校のような「いじめ」などは全くなく、毎日、授業が始まると必ず教育勅語の暗唱をさせられ、それに修身などがあって教育の中心になっていました。

四年生の時（男女一組で六十余人）の暑い初夏の日のことです。昼食の後、丸山の陰の通称十三曲がりといわれる海岸で二時間ほど浜遊びをして、教室に戻り帰り支度をしていると誰かが「蛇だ、蛇だ！」と大声で騒ぎ出したので、先生も何事かとそっちの方に行きました。みる

と、後藤君の机の中に卵の殻を割って出てきたカナヘビが五、六匹チヨロチヨロとはい回っていました。これには一同びつくり。なんでも昼前の遊び時間に卵を取って来て、硯の下に敷く布にくるんでおいたとのこと。まさかふ化するとは思わなかったのに、机の中は暑いのでふ化したのでしよう。担任の川越末松先生も叱ることもなかったようでした。七十年前のことを思い出して、昔話を懐かしく思っています。

現在は同級生の方々も大半は逝去されましたが、特に今次の大戦では若くして戦死された方がおります。

あの活発だった後藤敏一、髭金松、五十嵐正一、幾井廣吉、八幡八郎、茂野富雄、福沢勝治君など七人です。

昭和十一年、余市町での徴兵検査の時です。帰りの船便が無く古平に帰れないので余市駅前の旅館に一泊して、その時、二十九人全員で記念写真を撮りましたが、みんな若く元気はつらつとしていました。

←（前ページ四段目から続く）お祭りは九月十七日で今でも続いています。お参りの人はあまりいないようで、私は、浜町から何人かの人と毎年お参りをしています。

この青峰観音さまは、昔から『海上安全』の観音さまとして

平成七年は戦後五十年に当たるというので、この機会に七人の慰霊供養を計画し、古平在町の同級生諸氏に呼びかけましたところ快諾を得たので、町外からの同級生にも案内して参加していただき、八月十四日、禅源寺でねんごろに供養を営み、ご冥福をお祈りしました。

引き続き参加者十七人で、新地町で別席を設けて親睦会を開きました。その席で、私たちが小学校の時に習った国語と修身の教科書の復刻本を見せました。国語は、『ハナハト マメマス』。修身は『きぐちこへえは しんでもラッパをくちか

らはなしませんでした』等々、懐かしい当時の話が次から次と出て、話に花が咲き、時の経つのも忘れるくらい楽しい一日を過ごしました。

年々歳々老齢化していき、少々淋しさを感じますが随分と長生きしたものと思っています。

て、漁師の人たちから厚い信仰を受けてきました。

昭和のはじめ頃にはまだ船入瀬が無かったし、船も手漕ぎの川崎船が多く、漁師の人も家族も海難が一番心配でした。

ある冬の日のことでした。天気が急変して雪もまじり、辺りが暗くなってきた船が港に戻るのも困難になってきた時、観音さまのお堂から見えた灯を頼りにして船が助かったそうです。それから後になつて、お堂の後ろに鉄柱が立てられ、そこに赤い標識灯がつけました。

観音さまは多くの人たちによって守られ、お祭りも盛大に行われてきましたが、時代の移り変わりと共に人の集まりも少なくなってきたのは残念です。

今でも信仰の厚い人たちがよって守られ、お祭りの旗が丸山の高台にひらめくと昔のことが懐かしく思い出されます。

お堂の前に立つて余市の方を見渡すと、目の下に新地町一帯が眺められ、浜町方面が一望できます。ここは空気がよく澄んでいて、小鳥のさえずりが聞こえ、草木の緑の美しさに感銘しています。

向ひ風まともに受けて青峰の観音さまも今も居おはす

# 遙かなる故郷の思い出

[20]

## サンマは寝て待ての話 (下)

橘 義 春

一時間も冷たい海の中に手を入れ、サンマを舟の中に放り投げていたら指の感覚がなくなつて、ニギニギが思うようにできなくなつてきた。仕方がないので五本の指で輪をつくつて、左右に動かしているとその中にサンマが強引に入り込んでくる。

「なんぼなんでもそれだら少し高いベサ、負いでケレ」

つのため能率は低下するが仕方がない。それでも二人で三時間程もやっていたら、磯舟がサンマでいっぱいになった。これ以上獲るとちよつとの波でも転覆する恐れがでてきたので、今日はこれで打ち切りにした。杵組

「ガンガン一杯で五百円でどんな」

みとむしろは舟から切り離して捨てたが、まだ海の中にはサンマが真つ黒になつていてむしろから離れなかった。正吉さんの感が当たつて、今日は大漁であつた。

「わがったわがった、五百円で買った！」

磯舟を防波堤の国の船着き場に着けた途端に、石油缶を持つた闇屋、通称ガンガン部隊が、大勢やつて来た。さすが闇屋の情報入手は早い。

「この日の売り上げで、私の分け前は一万円ぐらいはあった。」

「サンマ売ってけれや、ガンガ

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

「おんじもおんこチャも

何しろ漁師の給料が月二千円ぐらゐの頃だったので、相当なゼンコが手に入つたわけである。ところが、闇屋のガンガン部隊の方もチャッカリしていたようだ。後で聞いた話だが、ガンガン一杯五百円で買つて行ったものを、小樽で、三匹百円で飛ぶように売れたそうだ。上には上があるもんだ。

丸山沖でサンマが獲れたというニュースは、その日のうちに町中に広がった。次の日になると、丸山沖は磯舟でいっぱいになった。古平中の磯舟が出漁したらしい。サンマの数より舟の数の方が多いのではないかと思われるほどであった。こうなると一日やつて、舟一隻でサンマがガンガン二、三杯の量にしかならなくなつてしまひ、値段もガンガン一杯五十円にまで下落してしまつた。

古い新聞を見ているといろいろと面白い記事がある。鯨の好景気で、ついこんな唄も出てくるようで、その繁栄ぶりが伝わってくる。

### 漁場の唄

鯨の好景

風だ 鯨なぎ

よんべも群来だ  
ヤン衆 ヤー出て来い  
サー 鯨の網起し

鯨の神様

ドーツコイ  
ドーツコイ  
ドーツコイ

おんじもおんこチャも

船頭やー頼むぞ  
サー網起し

鯨来たかよ

ドーツコイ  
ドーツコイ

鯨雲りだ

今夜も群来だ  
大漁ヨー祝いだ  
サー網起し

鯨の馬鹿野郎

ドーツコイ  
ドーツコイ  
ドーツコイ

(大正十五年・小樽新聞)